

# 同和問題是題（道徳）学習指導案

平成3年5月17日（金）第6校時

3年A組男子19名女子18名計37名

指導者 佐野富子

## 1 主題 差別を乗り越えて

資料：きず跡（私の願い）

## 2 主題設定の理由

3年生としてスタートして1ヶ月余り、生徒たちにもそして担任にもいよいよ3年になったという気負いがあり、毎日があわただしく過ぎるなか、生徒一人一人の心の思いをくみとったり、膝つきあわせて話し合う時間もつくることのできない現状がいまここにある。クラスの雰囲気は、全体的に活気に乏しく、何に対しても受け身で、自分の進路にたいしても、親：先生がどうにかしてくれるだろうと他人への依存の高さが少しへにつく。しかし、これは表面的なものであって子供たちの心は揺れ動いている。厳しい受験競争の中、1回のテストの結果に一喜一憂し、成績が悪い時、自分以下の存在を求め、心のやすらぎを覚えている子どももいる。そんな中、こどもたちにみんなでよくなる競争をしていこう。みんなで支えあい、みんなで伸びていこう。決して成績は良くなっていないのに席次で安心していくーそんな愚かな思いを捨て、競争の原理と連帯の原理をみんなで統一していこうではないかと訴えた。

そして、クラスには、昨年より引き続き担任することになったAさんがいる。小学校三年生より登校拒否の傾向がみられ、二学年では欠席日数が100日を超えた。彼女の心の中のかっ藤は激しく、他人をよせつけず、外部世界と自分を遮断することにより、心のバランスを保とうとしている。昨年2名の長欠生をだした思いから、クラスというのは全員がそろい、はじめて成立すると確信する。彼女一人を欠き、そこに残り全員が、明るく心に残るクラスがたとえ存在しても本当の明るさではない。友の心の痛みを理解し、眞の支えあう仲間集団でなくては、そこに明るさは存在しない。相手がふれられると傷つくであろうと自分に都合よく解釈することは、そのこと自体既に相手を低いもの、劣るものとして差別しているのだということがなかなか理解しきれていない。一人一人の問題を自分の問題としてとらえさせ、自分を語ることの喜びと連帯の喜びをクラスの中で実感させていきたいものである。

さて、昨年より同和問題学習に学年全体で取り組んでいくことができるようになった。多くの友の前で自分の思いを語り、考えることの苦しさと喜びを知った。

その中から、同和問題学習を積極的に自分の問題として取り組む姿勢や差別解消に向けての熱い思いがじょじょにではあるが、生まれつつある。大勢の支えあう仲間の一歩の前進を確認しあうことの喜びを知ってきた。

対象地区生徒は自分の置かれた立場を自覚しながらも、もう一方では、逃げれるものなら、隠せるものなら隠したいと相反する思いの中でゆれている。「私は、毎月先生からもらう学習会の封筒がいやでたまりません。学習会も行っていないし、他の友達が見たら中身なんてきっとわからないだろうけど、つい机の中におしこんでしまいます。差別と真正面から向き合い、頑張る気持ちはあります。でも、気持ちとはうらはらなことをしてしまいます。」本校には、25パーセントの対象地域の生徒が在籍する。地区外の生徒は、「誰が地区の生徒であるか」を暗黙に了解している。それでも隠そうとする。それだけ胸はっていえない差別の厳しさがここにある。

しかし、今私達はこの取り組みの中、この問題が話し合われたとき、じっと息をひそめ、通り過ぎるのを待つような子どもたちだけにはさせたくない。自らの立場を自覚し、人間として人間らしく生きぬく展望と確信を持たせるためにも、この取り組みを徹底的にやらねばと痛感する。子どもたちは、今大きく成長しようとしている。自分自身の差別心を洗おうともしている。現実から目を反らしたり、建前だけの議論から離れ、自分自身を語ることが出来つつあるように思う。しかし、まだ入口にすぎない。

そこで、本資料「きず跡」を通していまも部落差別が厳然とのこっていること、部落の人と結婚した姉からおくられた洋服というだけで差別の対象とされたことを通して、差別するもの、差別されるもの、ともにお互いが傷つき不幸になり人間性を歪めてしまうことをわからせたい。また、差別する誤った考え（偏見）が語り継がれてきて、まわりの人々が部落を解放することなく今日まで、差別を許してきたことについても十分考えさせていきたい。そして、作者が最後に部落差別に立ち向かっていこうとする決意に学び、そのいきかたをみんなが助け合い、支え合い、部落差別の不合理：矛盾に強い憤りを感じ、差別解消に積極的に取り組む態度を育てるため、この主題を設定した。

### 3 ねらい

差別の不当性を見抜き、憤りをもたせるとともにそれを許さない心を育て、仲間とともに自ら差別解消に取り組もうとする態度を育てる。

### 4 視 点

集団と連帯

## 5 指導計画

### (1) 常時指導

あゆみ・学年通信「ねんりん」を通して自分の生活を見つめ直し、正しいことを正しいといえ、行動できる仲間づくりに努めさせる。

### (2) 関連的指導

道徳「峠」 —— 1時間

進路決定の瞬間を1年後に控えた中学三年の生徒一人一人の中には、様々な不安が胸にわきおこっているこの1年、人間としどのように生きていくか、人間としてのるべき姿を考えながら、主体的な生き方を自覚させるために、詩「峠」を一人一人の胸に刻みつける。

### (3) 核心的指導

道徳「自分以下を求める心」 —— 2時間

道徳「きず跡」わたしの願い —— 2時間（本時 2/2）

### (4) 発展としての関連指導

行事「人権問題意見発表会」

### (5) 常時指導（発展）

日頃の生活の中で差別を見抜く力を養っていき、協力によって問題の解決を図ろうとする意欲や行動を育てる。

### (6) 本時の指導

#### 1) 目標

部落差別を自分の問題として語ることができ、生活の中で仲間とともに差別解消に積極的に取り組む態度を育てる。

#### 2) 展開

	学習活動	主な発問と期待する生徒の反応	指導上の留意点
導入	資料をよみ一人一人の思いを発表する。	○きず跡を読みどんなところが心に残ったか発表する。 ・人間として美しい生き方をしたお姉さんを差別していくことに憤りを覚えた。 ・本当の友達がどういった関係のものか考えさせられた。 ・作者の心の中にも差別心があると思う。	できるだけ多くの生徒に発言させる。

展開	晶子さんたちがとった態度について考える。	<p>○「おまはんの姉ちゃんの服や気持ち悪うないん。」「おまはんいつからA町の子になったん」の言葉はどんな気持ちからでたのだろうか。また、それをどう思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分より良い服をきているので妬ましい。</li> <li>・同和地区の人を自分より下におくことによって、優越感を持つ</li> <li>・一人では言えないが、何人もが集まると自分の心の奥にひそむ(自分以下を求める心)が姿をあらわした。</li> <li>・この発言は、差別であり、決して許されるべきものでない。</li> </ul> <p>○晶子さんたちは、どのようにして部落に対する差別心をもつようになってしまったのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家族や友達などから同和地区に対する偏見を教えられた。</li> </ul>	何が差別があるかをはっきりとらえさせる。  同和問題について考えない家庭や社会の無理解が、差別を今もなお許してきたことについて考え方させる。
	作者の心の変化について話し合う。	<p>○「姉ちゃんのバカ」と呼び、姉の服を脱ぎ捨て、踏みつけた時の作者の気持ちについて考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なぜ部落の人と結婚したのだろうと姉をうらむ気持ち。</li> <li>・晶子さんたちがわるいのに、それに気づかず、姉のせいにしている。</li> </ul>	作者の心の中に差別心を洗いながら、本当に人間らしく、美しく生きることについて考える。

		<p>○家にかえり一人になり冷静になった作者が差別に立ち向かっていくが、どうしてすぐに晶子さんの間違いに気付き、話をすることができなかったのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作者自身の心にも差別心があった。</li> <li>・仲間はずれになるのがこわい。</li> </ul>	
		<p>○自分の心の中で一人解決しようとしている作者をどう思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・心配をかけたくないという気持ちがあるから、当然である。</li> <li>・作者のやさしさは、言い換えればこの子の弱さであると思う。</li> <li>・黙ることは、差別解消につながらない。</li> </ul>	<p>同和問題の解決はすべてのひとの幸せにつながる。みんなでとりくむ問題であることをわかる。</p>
発展	<p>この資料を読んで、私たちは同和問題にかかわって、どのような生き方をしていこうとするのか考える。</p>	<p>○この資料を勉強てきて、これからどうしていこうと思うか。どう生きるのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人の悲しみや苦しみが分かる人間になりたい。</li> <li>・自分の中の差別心をなくすためにも同和問題学習をしたい。</li> </ul>	<p>差別解消に向けて取り組もうとする態度を個々の生徒の中に確立させたい。</p>

「同和問題提真（道徳）研究対受業記録

きずあと —— 平成3年5月17日

- T 1 B組からはじまって；C組、A組と3回目になっています。3年だけでは、2回目になりますけど、学年全体で同和問題についての勉強を今からはじめるわけですから、A組のみんながいろんなことをかたってくれる。それをしっかりと心に受けとめ、A組の授業が終わったあと、そのことについていろいろと深めていきたい思います。みんなの心に残る2時間になるようがんばりたいと思います。それじゃA組の人しっかりがんばってください。
- T 2 A組がきずあと勉強をします。それで、これが宿題になったクラスもあるので、どういった内容であるかをEAさんによんでもらいます。EAさんお願ひします。
- EA きずあとを読む。
- T 2 はいありがとうございます。さて、このきずあと資料なんですが、2年のときの資料に比べて大変短いと思うんです。でも、今のみんなの気持ちに先生は一番あった資料でないかと思います。それじゃ、この資料を読んで自分はどんなことを思ったか。又、こんなところに心がつかえたという部分があると思うんです。それを最初に発表してもらいたいと思います。手をあげて自分の思いをしっかりと発表して下さい。どうしても、プリントを読まないと見えない子は、読んでもいいけど、できるだけプリントなしに今の自分の思いを語ってください。3人ではすこしあびしいね、あー4人、手がしんどいけどまつてあげてね、他の人はどうですか、あーあがってきましたね。上手に言葉をつくろう必要はないよ、今の自分の思いをぶつけて言ってよね。
- SK 私が一番心に残ったのは、お姉さんがA町の人と結婚して、お父さん、お姉さんとけんかしていたでしょう。あそこで、部落の人と結婚したら不幸になるという感じで、自分の子供は部落にはやらないと言っていたけど、私が言いたいのは、部落の人と結婚したら不幸になって、部落でない人と結婚したら幸せになれるのかと言いたいんです。
- HT ぼくは、晶子さんたちを許せません。姉にもらった服だからといって、けいべつするような行動をしたこと自体が許せないし、また、晶子さんが言ったことも絶対に許せない。
- KY その服を脱ぎ捨て、足でなんべんもふみつけたというところが心に残りました。お姉さんが、せっかく心をこめて作ってくれた服をどうしてふみつけないといけないのかと思いました。
- KK 服が汚いとか言われて、この人が姉のせいにして服を踏みつけたりした。そのところが大きいに間違っていると思います。
- HJ 私は家に帰って、差別のことについて必死に考えた。差別に立ち向かおうとしたことが心に残った。あの勇気は、今のぼくにはないような気がしました。
- T 2 最初、友だちからいろいろいわれておちこんで帰ってきて、お姉ちゃんの服を踏みつける

けど、冷静になって勇気をもって立ち上がろうとした。今のHJにはそういうところがないということよね。他に2, 3人意見を聞かせてほしいな。友だちが一生懸命語ってくれています。顔をあげてまっすぐ前を向いて、同じような思いでもいいですよ。NM先生が「前から見ていると、みんなが目で合図をしてあててほしいのがみえる。」といっていましたが、そのとおりですね。でも先生はあてません。手をあげて自分の思いを語ることにこそ、先生は意味があると思うんです。自分で手をあげれん者は差別解消に向かって立ち上がれんと思うよ。ちょっといいすぎかな。あ、NTが手をあげたよ、それに続いてみんなガンバレ。

NT 同じ服なのに、くれた人が誰かによって態度をかえていくということに対して腹がたちます。

NT ぼくもよく似ているけど、お姉さんがくれたということだけで、差別心をむきだしにしていることはおかしいと思います。

T2 それで、みんなに感想を言ってもらったけど、その感想の中にはこれからいろいろ話し合っていかなければならない問題が含まれていると思うんです。まず、その中で「おまはんの姉ちゃんの服や気持ち悪うないん、おまはんいつから同和地区の子になったんえ。」という言葉があるね。それは、どんな気持ちからでているんだろう。また、みんなはそれをどう思いますか。心の奥にどんな気持ちが潜んでいるのだろうか。

KY 自分より相手の方がいい服を着ているので、どこか、相手の自分より劣っているところをみつけてやろうという気持ちだと思います。これこそ、自分以下をもとめる心だと思います。服について、関係ないことまでひっぱりだして、とやかく言う人をぼくは許せないです。

IM ぼくは、その言葉を吐くのは、相手は部落の人間だから自分より劣っているのがあたりまえと思う気持ちだと思います。それに、いい服をきてているので、はがゆいんだと思う。

HR 同和地区に対する偏見からこんな言葉が出たんだと思います。よくこんなひどいことが言えたなあと晶子さんの人間性を疑います。晶子さんらの言葉は、「言葉の暴力」ではなく人を殺す「言葉の凶器」といってもいいすぎではないと私は思います。

NT ぼくは、KY君と最初は同じで、自分よりいい服を着ていたということもあるんだけど、それよりこの私のお姉さんがA町の人と結婚したということで、部落にいるという人が作った服なんかは、どんなにけなされてもしかたない、あたりまえだという気持ちからでいると思う。

EA ほとんどみんなといっしょだけれど、晶子さんたちはやっぱり自分たちよりいい服をきていたというねたみの気持ちも混じっていると思うんです。でも、そういうのって確かに素直な気持ちかもしれないけど、同和地区への偏見をもっていたために、そういう言葉になったと思います。だから、私個人的な考えなんだけど、もし作者とか、その作者のお母さんが作ってくれたりした服なら、ねたみなんかなしに素直にほめていたんでないかと思います。

- T 2 姉ちゃんが作ってなくてお母さんが作っていたら、きれいな服だなー、今の流行の服だなーというのですますんだけど、同和地区の人を作ったけんという偏見の目が、この言葉をいわしたんだということよね。
- YS 部落の人は気持ち悪いとか、普通の人と違うと思っているーそういう気持ちが言わしていると思う。お姉さんの作った服ということを知らなければ、そのままええ服やなあーの一言で通っていると思う。
- T 2 言葉の凶器とか、これがお母さんが作っていたらこういう言葉はでなかつた。やっぱり、同和地区に対する差別、偏見の目が、こういう言葉を言わしたのではないかとみんなが言ってくれた。それじゃ、こういう目は、偏見の目は赤ちゃんとオギヤーと生まれたときなつた。どのようにして生まれたか。学校でちゃんとみんなも勉強している。晶子さんもしている。それなのにどうして、こういう言葉がでてくる。その背景はどんなんだろうか何か言わしているんだろうか。
- HT 晶子さんたちが、差別をしたくてしたのではない、小さい頃からの親の教育が関係していると思う。
- IM ぼくも晶子さんたちは、世間の人とか、あの子いかんとか聞いて、部落の人への偏見から生まれたと思う。
- KA 晶子さんたちは、多分親とかに「あの子と遊ばれんよ。」とか言われてたと思います。それで、部落の人を変な目で見るようになったんだだと思います。
- SK 私は、この同和問題の学習をいいかげん中途半端にしているからだと思います。私自身も2年生になってから、はじめというか本気で取り組むようになりました。それまで、小学生のときなんか私は、お母さんに「私は部落の人と違うんやなー」と平氣で聞いたりしてそれから勉強しだして、やっとほんまの心のいたみというのがわかった。
- T 2 この中途半端な学習というのは、即先生に言ってくれた言葉だと思います。やっぱし、先生もこうやって勉強して、自分が同和問題に関してみんなと同じ土俵の上にあがって勉強してきたかと聞かれたら、うなづけん部分があります。新宮さんの言葉を心に留めて、これからみんなとともに先生頑張っていきます。親や家族 地域社会のそして、学校の勉強の中途半端さが、こういう言葉をだしたんではないかといつてくれたけど、もう一つ考えてもらいたんだけど、作者がいろいろいわれる姉ちゃんのバカと呼び、姉ちゃんが心を入れて縫ってくれた服を踏みつけるその前に、この服がこの川の水のように汚いのか、バカ、姉ちゃんのバカと思いながら、姉ちゃんの服を踏みつける、この時のこの作者の気持ちはどんな気持ちなのか。どういう気持ちがこんな言葉を言わすのだろうか。
- KT 姉に対して「なぜ、部落の人といっしょになったんえ。」という気持ちと自分で差別の道へひきずりこまれたくない気持ちで一杯だったと思う。その姉に対する作者の思いが、このような行動をとらせたのだと思う。
- EA 最初は、何を考えているのか分からなかったんです。でもよく読んでいるうちに、つらかったからこんなことをしたんだと思います。こういうつらい気持ちちは、何か姉に対して結

- 局晶子さんと同じように差別心とか偏見をもっていたんだと思います。同和地区の人と結婚したということで、私にまで差別されるようになったということで、姉に対する反感がこういう行動を取らせたんだと思います。
- NT 姉が自分にあう服をおくってくれなかつたらよかったですのにと思ったからだと思います。姉やA町の人を自分も心のどこかで差別していて、こんな行動に出たんだと思います。
- SS ぼくは、この作者の心にも差別心があると思います。ぼくは、怒りをぶつける人を間違えていると思う。晶子さんや自分の差別している心に怒りをぶつけるべきでないかと思います。
- KJ たしかに、その子にやさしい気持ちも心のどこかでもっていると思うけど、あきらかに姉や部落の人々を見下そうとしている。姉を責めるべきでないと思う。本当にいけないのは自分の差別心なのだから、自分自身の心を責めていかなければならないと思う。
- HT この人は、いつも仲良く遊んでいる友だちに裏切られる悲しみにたえられなかったからだと思います。
- T2 今本当に責めなんだらあかんのは、作者自身の気持ちでないかといわれたけど、みんなそこまでの気持ちにたつことできるだろうか。姉ちゃんの結婚のとき、正しい思い持っていたのに、いざ、自分にこの問題がふりかかったとき、姉ちゃんを責めている。自分の心に気づかんと姉ちゃんを責めている、どう思うか。
- SK 姉ちゃんの結婚のときは、小さいしわからんし楽だった、あんまし考えなかった。姉ちゃんが幸せになるならどんな人でもいい。自分で関わってきたらいややなあと思う。私歯部族と違うんやけど-----。
- T2 日本人というのは、T1先生が言ったんだけど、遠くの不幸な出来事には美化する。あのコンスタンチンちゃんにも何千万もの義援金が集まってくる。だけど、自分のまわりで食べる物もなく苦しんでいる人には、その人が悪いからこうなると冷淡になる。先生は、ふとそんなこと思いました。さて、その後この子は強くなっていくんだけど、両親やいま幸せに暮らしている姉に言ったらつらくなる。そうだ、自分一人で心の中にしまって解決していくこ、でも自分は差別はしないぞという生き方をみんなはどう思うか。
- SK 一人で解決しようとしているけど、やっぱり一人だけだったなら何の解決にもならんし、晶子さんたちは親友だったのに、裏切られて、人が信用できなくなつて、こんなこと人に言っても分かってもらえない、一人でやろうとしていると思う。だから、周りの人も晶子さんが一緒にになって信用できる仲間、ほんまの親友をつくったらしいと思う。
- IM ぼくは、いつまでも自分の心の中にとどめておいても絶対解決できず、のこって行くと思う。
- HT 差別に対して、一人で悩んでも名にも解決できないと思うので、先生や友だちに相談していくべきと思う。
- KK やっぱり、他人に言うというのはとても勇気がいると思いますけど、一人で悩んでいても何もならない思います。何のために、友だちや先生、親がいるのか考えてほしいと思います

- す。
- KY 自分の心の中で、一人解決するのではいけないと思う。絶対この問題は一人では解決できないので、自分で考えたことを他の人にはなし、そして、相手の考えも聞き、そして、考えを深めていったりして、みんなで解決していかなければならないと思う。
- KK そのことについて間違っていると思う。自分が思っていることを自分から口にだし、人に思いを伝えていくことから始まると思う。自分一人で考えるのなら。差別解消へとはつながらないと思います。自分の気持ちを伝えたら、じぶんもすっとするし、言わないと結局心の中で悩むばかりだと思います。
- NT 自分の心の中でいくら叫んだところで誰にも聞こえないのに、なんで心の中だけにおいておくんだろうと疑問に思っていたけど、お姉さんことを心配するのは、それはそれでやさしいけど、本当に差別を解消するなら学校の先生や友だちと話し合って行動することこそ、解消につながると思います。
- KT 一人で解決するのは難しいと思う。一人で解決しようと考えても分からないことや、誰かに相談したいこともでてくると思う。それを本当に相談できる友だちをつくり解決していくべきだと思う。
- HM 自分の心の中で一人で解決しようとしても、いつまでたっても解決できないと思います。また、こういうことが起きたとき何もできないまま終わると思います。
- T 2 今、黙っていることはやさしいかもしれないけど、差別はなくならないと言ってくれたしました、それを話していく仲間、自分の思いをぶつける仲間が、これが今この子には必要なんよ。本当の友だちは何のか?ということよね。  
あと5分になったけど、去年から同和問題学習を全体で取り組むようになって、今自分はどんな思いをもっているか言ってください。ある子がいってきた。「自分は 正しいことは何か分かっている。何をいわなんだらあかんか知っている。でも、心の中にはモヤモヤとしたものがあって、みにくい気持ちも一杯あってごっついつらくなる。それで、きれいごとばっかり、あたりさわりのないことを並べてしまう。」みんな今、マイナスの気持ちプラスの気持ちいろいろあると思う。でも、同じ土俵の上に立って話していくためには、自分の思いをいわんとあかんと思うのです。今の思いを本音で語ってください、きれいごとでない、どろどろとした部分を。そして、周りの人も本音で受けとめて下さい。今、本音で受けとめあう学年集団を目指しているんよね。
- ST 私は、差別に対してまだまだ勉強が不十分です。だから、これからもっともっと勉強して何が差別かをみきわめて、人に言える人間になりたいです。
- KA 晶子さんのように部落の人を偏見で見下したりしない生き方をしたい。そして、私の心中にある差別心をせめていって、だんだんなくしていきたいです。
- KH 差別をなくすといつても、今の私たちは先生の言っているように、自分で手をあげて自分の思いをいうことしかないと思います。そして、晶子さんのような人かいたら、それはちがうよといえるくらい自分に自信がもてるようもっともっと勉強していきたいです。

- H J もし、自分が部落差別にあつたら、絶対に逃げたらいけないと思いました。自分から差別に向かって立ち向かっていこうと思いました。自分から言わないと差別はなくなると思います。
- KK もし、差別に出会つたら逃げずに立ち向かっていきます。でも、一人ではどうにもできないので、みんなと一緒に解決していきたいです。
- KK ぼくは、この社会をじっくりみてきて、差別することがどんなに人を傷つけるかを実感するようになった。ぼくは、本当に差別が許せない。ぼくは、これからも差別をしないし、立ち向かっていくつもりです。
- I M ぼくは、部落とかを考えずに友だちづきあいをしていきたい。でも、正直な気持ちこれからもずっとそうかといわれると、少し不安です。
- SK 仲間、仲間というけど、ほんまに心を許せる友だちでないと仲間でないと思います。私自身も心の中をさらけださんと、他の人も信用せんと思います。
- T 2 1時間、3Aがしました。まわりのみんなどうでしょうか？先生今まで、こういうての授業は、手をあげるとか、中身のあるもんにしようとか形ばかりにとらわれてきたように思います。そして、ほんまもんの同和の勉強しとらなんだように思います。これから、みんなだけ勉強していくのではなく、先生自身もみんなの中に加えてください。先生も全体学習で手をあげます。自分の思いを語ります。教師としてでなく、一人の人間として美しく生きるために、一緒に頑張りましょう。



T<sub>1</sub> 学年全体での学習に入る前に、今日みんなの授業を見に来てくれました。松村勝子先生（県同教）に話を聞いていただき、全体での話し合いには入りたいと思います。

みなさん、こんにちは。今、後ろで中学3年のみなさんが同和問題について一生懸命に勉強している姿を見せてもらつて、最後に胸が引き裂かれるような思いになり、私も是非一言しゃべつりたくなつて前にでてきました。私は今、徳島県同和教育協議会というところで、先生方のお手伝いをさせてもらっています。2年ほど前は麻植郡山川中学校にいました。その前は鴨島第一中学校にいました。そこでの思い出を話しますと、鴨島第一中学校にいたとき、板野中学校と同じように同和教育の研究大会が行われたんです。

最初私もそうだったんですけど、校長先生（佐藤文彦校長先生）だけが一生懸命頑張ろうと言つて、他の先生方や生徒のお父さん、お母さんも、「校長先生、こんな勉強する間にうちの子どもは中学3年だから、英語や数学をもっと教えてください。」とそんな声が随分あつたんです。

ところが、一生懸命やつて卒業していった先輩が中学校に帰つてきて、「先生、ありがとうございます。ぼくは鴨島第一中学校の卒業生であることを今、誇りに思う。」と全校の後輩の前で話したんです。私自身も、今、同和教育協議会にいるけど、20年前の私には、この仕事にかかわっていくとは思わなかつたんです。今、思つてみると、自分が恥ずかしい。随分と醜い差別者であったと思います。佐野先生が「私も勉強させてもらいます」と言つていたけど、それと同じような思いで一生懸命やつた鴨島第一中学校でいたことをうれしく思います。

私の勤務している徳島県同和教育協議会には、いろんな人が訪ねてきます。去年の秋頃訪ねてきた女子大生の話をします。去年の10月の末、県同教のドアをノックする人がいます。どうぞと言うと、随分若い、髪を長くしたジーパン姿の女の人が入つきました。恥ずかしそうにしているので、「どうぞおかけください」というと、「ここは同和問題のことをいろいろと教えてくれるんですか」といい、「いろんな本を貸してください。私、同和問題のことを勉強したいんです」と話しました。ちょうどその頃、同和教育の研究大会が勝浦中学校であったので、その案内とか、小学校や高等学校の研究大会や全国大会のことを教えて上げたら、その人はその全部の会に參加したんです。本当に一生懸命勉強するんですよ。今、この「きず跡」の授業を見ながらそのことを思い出しました。

あるとき、県同教にいる先生が、どうしてこんなに一生懸命勉強するのか不思議に思つて聞いたんだです。ひょつとしたら同和地区出身の娘さんだろうか。いろいろ思いながら聞いたんです。「お聞きしてもいいですか。あなたは何でこんなに同和問題の勉強、一生懸命やるんですか。」と聞くと、「私は卒業論文に部落問題をテーマに取り上げたんです」「ああそうですか。どうして卒業論文に部落問題を取り上げるんですか。」と聞くとしばらく黙っていました。もう一回「よかつたら言ってくれませんか。」というと、ポロリと大粒の涙を流して、「あの、私、今、

好きな人がいるんです。一年余りお付き合いしているんです。大好きな、大好きな彼がいるんです。ところがつい最近、彼にぼくは部落の出身やけど、これからも付き合ってくれるか。そういうことを言われた。私はそのとき物凄い衝撃を受けた。振り返ってみると、小学校、中学校、高校とずっと同和問題の学習をしてきた。その授業の中で一生懸命手を挙げて、私は絶対差別をしない。そんな醜い人間にはなりたくないと言ってきた。家庭でも学校でも私は優等生だった。ところがこの問題が自分自身の問題として、自分の目の前に突きつけられたとき、心が揺らいだ。私は自分自身が歯がゆくて歯がゆくて仕方がない。どうしたらいいんだろう。家で両親に話すと一言のもと、明日からお付き合いやめなさい。そういう声で片付けられてしまった。それに対して私は何も両親に言えなかつた。言おうにも、説得しようにも、何も知識がない。いつたい私は何のために同和問題を学習してきたのか。私が学んだのは何だったのか。だからもつといろんことを知りたい。強くなりたい。私はとにかく彼が好きでたまらない。ただし部落という二文字を除いた彼が好きです。でも彼に部落が重なったとき、私の決心はぐらつきます。」こう話してくれたんです。

涙を流しながら語る彼女を見て、何でこんなに苦しまないかんのだろうかと思いました。彼女は地区外の人なんです。それなのに結婚問題にぶつかってそれだけ悩んでいる。その話を聞いて私は頭をガーンと殴られたような気がしました。私の教えた子どもたちも、今、結婚適齢期を迎えて、どこかでこんなに悩んでいるだろうと思いました。私は思いました。彼女はそこで親の言いなりにならなかつた。彼との愛に終止符を打たず、これからも頑張っていきたいという思いがあつてくれたんだ。そのことがうれしかつたんです。私たちは言いました。「できるだけ力になります。一緒に考えましょう。」今でも時々電話がかかってきます。まだ彼女は勉強を続けているんです。

この「きず跡」のお姉さんが地区の人と結婚することによって、妹までこうやって悩んでいる。そのことと彼女のことが重なつて、みんなに話がしたかつたんです。彼女一人の力ではどうにもならない。我々もお父さんやお母さんと話をして、彼の大好きな彼にも強くなつてもらつて、頑張っていこうと思っています。でも彼女がそうやって勇気を出して我々のところへきてくれたこと、私たちも一緒に勉強するいい機会になりました。

みなさんの授業、前にも一度見せてもらったんですけど、みんなが一生懸命自分の思いを語つている。そのことが本当に自分を変えていくことになるし、これからもずっと頑張ってください。

T 2 松村先生からお聞きした話、そして、今日の資料に寄せてA組のみんなが語ってくれた一つ一つをかみしめて、学年全体で思いを膨らませていきたいと思います。この授業について、また同和問題についてみんなの腹の中にあることを語り合いたいと思います。

MM（男）この同和問題の勉強をしっかりと積み上げていくことについて、将来同和問題と出会つたときにしっかりと意見を持つことができて、しっかりととした行動を取ることができるようになると思います。

M S (男) ぼくもMM君の意見とよく似ていて、勉強はしているけど実際同和問題と直接かかわったことは一度もなくて、こんなときどうしていいのかわからないけど、勉強しないよりしている方が絶対いいと思うので、これからも同和問題の学習に力を入れたいと思います。

Y Y (女) 私は資料について何ですけど、主人公は晶子さんたちにとんでもないことを言われて、独りぼっちになって家に帰つて、姉がつくつた服を脱ぎ捨て、この服を踏みつける行動に出ているけど、もうちょっと考えてほしいと思います。それで最後は誰にもこのことは言わないと言っていたけど、自分の心の中に差別されたことをしまっておくのは差別解消につながらないと思うから、親に言つたら言つたでお姉さんのこともあるって大変だけど、主人公の力によって解決してもらいたいと思います。

S N (女) 私はいろいろ資料を勉強したけど、本当の差別にぶつかったときに、私はどうしようかとさつき考えていたけど、やっぱしこの子と同じようなことをしてしまうと思うから、そのとき晶子さんが言つたことを間違つていると正しく言えるためにも、深く勉強しなければならないと思いました。

Y I (女) 3 Aの授業についてですけど、私は今までの公開授業は発表する人が、決まっていたと思うんです。3 Aの授業は、多くの人が発表していてとてもよかつたと思います。手を挙げて自分の心の中にある本当の思いを発表することはすばらしいことだと思うから、クラスの授業だけでなく、この全体学習の中でも意見を言ってほしいです。

S N (女) Y I さんと同じで、他のクラスもたくさん意見が出るけど、A組の授業はすごいと思いました。自分の意見を大きな声でみんなはつきり言って、聞いていて本当に一生懸命真剣に考えているんだなあというのが伝わってきました。普段あまりしゃべらない子も、頑張つて発表してくれてすばらしかったと思います。

T : A組の授業についてでもいい。同和問題について思っていることを語り合いたい。そして何かをつかみたいと思う。一つ話しておきたいことがある。部落問題が自分の心の中で、これほどに重く切なく悲しくのしかかってくるにもかかわらず、そのつらいということが口に出して言えない。涙がこぼれそうになることがある。授業をしていて、友だちの話を聞いて、熱いものがこみ上げきて涙がこぼれてくる。でもその口惜しさ、つらさを訴えることができない。いつも我慢して終わっていく。何も解決しない。自分の中にある部落へのこだわり、差別心を洗うことができない。部落に生まれた人間が部落を自覚する。そして、差別をしない生き方、差別に負けない生き方を貫いていく。部落に生まれなかつた人間が、部落問題にかかわって、矛盾をしつかり見極め、絶対におかしいということを自分自身の本当の思いや生き方の中でとらえていく。みんなにとって部落問題とは何か。今日の授業に寄せる思いを聞きたい。そういう学習を深めていきたい。仲間がそういう思いを明かすことができず、切ない思いをしていることを知つてほしい。どうだろう。思うこと、日頃思うことを語つてほしい。そして、この学習を確かな営みにしていきたい。

M K (男) ぼくは差別を体験することになつても、心の中で差別はいけないとつても、実際に

口に出していく勇気がないから、結局差別してしまう側に立ってしまうと思います。そんな勇気を出すためにも、もっともっと勉強しなければいけないと思います。

Y I (女) 私は思うんだけど、最初の頃は、いろんな資料を勉強してよかつたんだけど、他人事のように思って、先生に注文なんだけど、もっと私たちの身近な生活にかかる資料で勉強してきたいです。

A S (女) 私、家族と一緒に同和問題について話し合うようになったんですけど、「将来、私が対象地区の人と結婚したら」と言つたら、父と母が言うんです。「地区の人はきたない。A S家の誇りがよごれる」と言うんです。私はそんなもんかなあと思ったけど、やっぱり差別というのは人の心を殺したりするし、私、もっともっと差別に抵抗していく勇気を持っていきたいです。

T 4 今、言ってくれたことA Sさんの家だけのことではないと思います。そういった口惜しさを味わつた人もいると思います。Y Iさんが言つた身近な資料を使って、話し合いたいということにも意見を付け加えてください。

S N (女) 私もY Iさん、A Sさんと一緒に。この作者の人も資料とか、学校でたくさん勉強していたと思うんです。でも身近な差別のことをちゃんと学習していなかつたと思います。だから正面から差別にぶつかったとき、どうしていいのかわからなかつたんだと思います。それからA Sさんの意見についてですが、今の話はA Sさんの家だけでないです。うちのおじいちゃん、おばあちゃんもそういうこと言つてきたし、今はそんなに言わんけど、やっぱしそのことは小さいときから言つてきていたし……。対象地区に生まれた人は、性格がいやらしいとか、そういうこと、ずっと小さい頃から思い込んでいたので、まだ抜け切らんけど、いっぱい勉強してちょっとずつでも変わつていただきたいです。

S E (女) Y Iさんがいつた身近なことについて勉強していきたいと私も思います。昨日私のクラスでいろいろな差別のことについて考えていきました。資料だと遠くの出来事という感じがしてくるけど、それが身近な人のことだったら、その子の気持ちになろうとするし、その子の性格もわかっているし、本当にその子と一緒に頑張らなあかんと思って勉強できると思います。

Y I (女) S Nさんとかと一緒に、おじいちゃんやおばあちゃんがきつくて、私は今でもあそこへ遊びにいつたらあかんと言われるんです。ほなけん、私とかも公開授業で結局いいことを言つても、この人みたいに部落の人と結婚するかと言われたらわからんし、おじいちゃんやおばあちゃんにあの子と付き合うなと言われたら一步引くし、私、喧嘩つぱやいから、喧嘩してきたよと言って、喧嘩した子の名前を言って、おじいちゃんにその子は部落の子やから喧嘩したらあかんと言われたら、やっぱりその子を見る目が変わつてきたし、結局資料を勉強しても、遠くのこととして考えてしまって、結局綺麗事で、先生によく思われたい、みんなに嫌われたくない、そんなことを考えて発表するから、この問題は解決していかないんだと思います。私はこんな気持ちを持っています。今の話に腹が立つてたまらん人、みんな

の本音、考えをぶつけてきてほしいです。

K S (女) 私もY Iさんと一緒に先生の喜びそうなこととかを意識して言よらんつもりだけど、心の中でほんまは違う考えを持っていて、本当に思っていることを言わないで、つくったことを発表している感じがあるかもしれませんけど、絶対に最後まで言つたことをやり遂げるとか、言い出しつぺになるかもしれませんけど、自分の言葉に最後まで責任をもてるようにしたいです。

Y Y (女) A Sさんの意見に対してなんだけど、A Sさんは両親に自分から部落のことを話せることがすばらしいと思うんです。というのは家族の団欒のとき、部落のことがひつかかったりすることがあるって、それを言つたら私の両親はどちらかというと部落の学習に十分でなかつたと思うから、部落のことについてどう思うかとたずねても、絶対答えがわかっているというか、そんなこと思います。私はだから聞き出せないんだけど、A Sさんがそれについて聞いたというのは勇気があるし、すばらしいと思うんです。

T 5 できるだけ多くの人が語り合える時間にしたい。言葉は短くともいい。それぞれみんな立場があるだろう。この前の授業で私がみんなに言つたこと、部落に生まれたことが恥ずかしいのか。部落に生まれたということで差別する方が恥ずかしいのか、どつちか。頭の中ではわかっている。でも先生、私、部落に生まれたことが恥ずかしいてたまらん。学校でその話をすると顔から火が出るぐらいあかくなる。そういう苦しみがどうしたらなくなるのか。どうしてそんな気持ちになるのか。みんなが本当に語り合える仲間にになり、そしてこの問題を本当に解決していく関係になつていくためにも、話し合いたい。語り合いたい。家のことを話すのはつらい。じいちゃん、ばあちゃん、とうちゃん、かあちゃんのこと、絶対差別がある。そのことを語っていくのはつらい。みんなが身近なこと、身の周りに起こつたことを勉強したいといった。そういう自分の生活、生き方にかかわることをやつぱり訴えていかんとこのことは変わっていかんと思う。重苦しいと思うけど、みんなが思うことを語り合いたい。

M S (女) 私の経験から話すと、何も部落について勉強していないとき、小学校のときみんなと徳島へ遊びにいったんです。バス乗り場でおばちゃんにどのバスに乗つたらいいんですかと聞いて仲よくなつたんです。それでそのおばちゃんにどこからきたんえと聞かれて、板野からきましたといきなりおばちゃんの態度が変わつたんです。私は部落問題のこと勉強していなかつたので、何でそのときおばちゃんの態度が変わつたのかわからんかつたんです。でも中学校にきて部落のことを勉強して、どうしておばちゃんの態度が変わつたのかわかつて、この勉強してよかったです。そのおばちゃんに対して何で態度を変えるのか不思議に思うだけで、何も言えなかつたし、わからなかつた自分が情けないです。

T F (男) 資料だとつい別のこと、遠くのことと考えてしまします。それではいけないと思ってます。自分の意見をまだちゃんと訴えることができないので、差別についてもつと勉強していきたいです。

R H (男) 資料だったらやつぱり心にないのに良いことを言つてしまつるので、自分に関係のあることにしたら本音が出ていいと思います。

R S (女) 私はASさんに対して何だけど、本当に結婚したいと思うのなら、部落とか部落でないとか関係ないと思います。部落の人と結婚してAS家の誇りがよごれるんなら、そんな誇りなんていらないと思います。

T 6 ASさんもそのことで今鬱々している。共に頑張つていこう。

M S (女) 私もRSさんと同じで家の誇りって何だろうと思いました。人間を否定し、人間を追い詰めていつまで守らなければならないものって、あっていいのだろうかと思います。

S E (女) 私の親は、あそこに遊びにいったらあかんとか、あの子とは遊ばれんとか言わないけど、部落についてきちんとした知識をつけてくれたかと言つたらそうではないと思います。よく考えると口には出さないけど、心の中で思っているかもしれないし、私自身も聞いてみたいけど、部落の人は恐いとか、親から差別の言葉を聞かされるのが、恐くて聞けないままです。これからもっと勉強してこの問題と真正面から取り組んでいきたいです。

S N (女) この前した同和問題学習の授業のビデオをお父さんにみてもらったんだけど、お父さんは昔は差別がきつかったけど、学校でこんな学習をすることがなかつたと言つていました。それでそのとき思ったんだけど、やっぱりお父さんも徹底して勉強していれば、今、差別はなくなつていたのではないかと思います。

K T (男) ぼくも間違つてることを間違つていると言える人間になりたいです。そのためこの勉強をみんなで頑張つているんだと思います。

Y I (女) RSさんやMSさんが言つてくれたことなんだけど、私はいつもそういうことわかっているけど、どうしても小さいときから言わされてきて、それが間違いと頭でわかつていても、どうしても親の言う方を聞いてしまうんです。そんな自分に腹が立つし、みんなのことを思うとすごく苦しくなつて、何で私がこの勉強してこんなに苦しくならんといかんのかという気持ちになつたり、またこんな私がいるから差別がいつまでもなくならんと思つたりもします。結局わかつていてもそういう気持ちになつてしまふ。みんなに悪いという気がします。

R I (男) ぼくはこの授業の始まる前に、森口先生に「研究授業、熱うなんりよるか」と聞かれた時、ちょっと考えてうんと言つてしまふたけど、熱うになるときもあるけど、しんどいのにこんな授業せんかつたらいいのにと思う時もあるし、授業を真剣に聞けてなかつた時もあつた。森口先生に言つたあと、今日頑張ろうと思つたし、そして今日の授業が一番熱くなつたような気がします。

T 7 部落問題の学習が煩わしいと思う気持ちは誰にでもあると思う。部落に生まれた人の中にも、部落に生まなかつた人の中にも、自分自身が真正面からかかわらんでもという気持ちがあつて、他人事ですませていきたいと思う気持ちが潜んでる。でもすべての人間がこの問題と向き合わなければ、その一人一人が本当の幸せをつかむことはできないと思う。この問題はすべての人間の問題である。そのことが頭でわかつていても、心は煩わしいと思つてしまう。人間にはそういう弱い気持ちと闘い続ける勇気が必要だと思う。人間としての熱きものがいると思う。そういう思いでさつき授業の始まる前、RI君と話をしたんです。

M S (男) さつきの話にもどるけど、ぼくは身近なことでも、資料でもどちらでもいいと思います。それは自分に関係あることなら、資料でも身近な出来事でも大差はないと思います。どちらかというと、『汚染一揆』のような心に響くようなものがいいと思います。

MM (男) 小学校から同和問題学習にかかわってきたけど本当に真面目に取り組んだのは、中学校2年からだと思うんです。小学校の時はうわべだけのものだったと思うんです。中学校2年になってからも始めの方は、同和問題の授業をすると聞いたらいやと思ったことがあったけど、やっていくうちに部落問題は他人事でなくて、自分自身の問題だと思えてきたんです。そして、この問題が解決していくことによって、廻りのいろんな差別もどんどんなくなっていくと思うんです。今まで差別とかがなくならなかつたのは、徹底的にやらなかつたからだと思います。

H I (男) いつもこの授業をやっていると心が苦しくなるけど、みんなが発表しているのを聞いていると何か自分が励まされているような気分になって、あんまり発表とかしたくないけど、自分の周りでもばあちゃんとか、その世代の人人がすごく差別しているので、ぼくとかそれより下の人は、絶対差別をしないように徹底的にこの勉強をしなければならないと思います。

Y I (女) 小学校のとき、同和問題の学習もけっこうしていたし、その度に発表していたけど、いつもいい気分になって、発表を繰り返すことによって英雄にでもなったような感じだったんです。私、目立ちたがりやでみんなの視線が私に向いていることが嬉しかったんです。そんな気持ちでずっといたんです。最初の公開授業もそうだったんです。桜になれと言われて、発表していた感じだったんです。ほなけど、2年D組の授業でほんまに差別に対して悲しんでいる人を見て、今までの私はいったい何だったのかと思った。ある子が泣いて「ほんなんやってほしいない。私、差別されている。」と言われてガーンときて、しばらくショックで、その後初めて同和問題についていろいろ話したんです。それで真剣に取り組みだしたんです。それで身近な問題を徹底して勉強していくことが大切だと思ったんです。

S N (女) 私もY Iさんが言ったように、2年D組の授業のあとでみんなとほんまの気持ちを出し合ったことが、この問題に真剣に取り組んでいくスタートになっています。あの時の話し合いが、今もこの学習に取り組んでいくエネルギーのようなものになっています。昨日B組がやった授業のように、どのクラスでもみんなで友だちの悲しみや苦しみをしっかりと背負い、差別解消に向けて、生きていくことのできる本当の仲間になっていくために、この学習は徹底的にやらなければいけないと思っています。

T : 昨日のB組の授業の話が出ましたが、今朝提出された生活ノートの中にこんな文章がありました。男子の生活ノートです。

「今日の道徳の時間、すごくつらかった。AさんやBさんが言っていた言葉の一つ一つが心につき刺さった。Aさんが泣いていたとき、僕はその気持ちが手にとるようにはつきりとわかつた。僕も、部落にかかわることをよく聞いていたからだ。そのとき、僕も手を挙げて発表しようと思つ

た。僕の手は震えていた。今までの部落にかかる話やいろいろなことで頭の中がグチャグチャになっていた。僕は手を挙げた。先生が僕を指名した。僕はちょっと話しただけで涙が出てきた。AさんやCさんが泣いた理由がはつきりわかった。僕はもっと話すつもりだったけど、言葉が出てこなかつた。これ以上話するのが本当につらかつた。思い出しただけで涙が出てくる。自分でもなんで涙が出てくるのだろうかと思った。これからは頑張ってちょっとずつでも発表していくこうと思う。道徳の時間が終わって、D君とE君がきた。E君は『自分は部落の人間だ』と言った。そして、『部落の人が悪いんと違う。差別する人が悪いんじや』と言つた。僕はなんかうれしかつた。こんなことを言ってくれる友だちがいることがうれしかつた。』

T：心の中にある本当の思い、それが恥ずかしくて言えない。本当の思いを隠し続けなければならない。それが本当の仲間と言えるだろうか。本当の友だちと言えるだろうか。仲間の苦しみ、悲しみをしつかり受け止め、その中で私たちが将来どういう関係でつながっていくかを語り合うことができているか。本当の仲間になっていく学習ができているか。みんなで頑張り続けたいと思う。人間の本当のつながりを求めて……。徹底的にこの学習に取り組んでいきたいと思う。一つのクラスが頑張るだけでは真の問題解決になつていかない。今日A組が頑張った。A組の頑張りを受けて他のクラスも頑張つていく。今日の公開授業A組が頑張つたから、全体での話し合いがこんなに熱いものとなつていつた。みんなで頑張つていきたい。そして、私たちの心の底から沸き起こる恥ずかしさや口惜しさや、悲しさを打ち破つていく生き方をつかみたい。今日の授業これで終わります。

